

マウント・ラッシュモアにて

伊東 富昭

この年末年始にかけてアメリカに行つて来た。昨年の同時多発テロ以来、アメリカ旅行ばかりでなく、航空機利用自体が敬遠されている中でのことで、あまり気は進まなかったのだが、何しろ計画は七月に職場の同僚の家で開かれた横浜の花火大会のパーティー中で酔つた勢いで決まつており、もはや否も応もなく連れて行かれたようなものだ。

主目的はスキーで、サウスダコタ州中西部に位置するデッドウッド郊外のテリー・ピークススキー場で六日間滑つてきた。ただ例年になく今年には雪が少なかつたようで、残念ながら人工降雪機で一部が滑走可能になっていただけだ。初日、砂埃の舞う駐車場ですキー靴に履き替えた時には、どうなることかと思つたが翌日そこそこの降雪があつてくれ、何とか持ちこたえることができた。ただ同僚の運転する車が側溝に滑り込んで、通りがかった地元の方に助けてもらわなければならぬハプニングにも見舞われはしたのだが。

さて、ワシントン、ジェファーソン、リンカーン、セオドア・ルーズベルトといった四人の合衆国大統領の大きな顔が岩山に刻まれたモニュメントがあるのがラッシュモア山国立記念公園である。所在地は飛行場のあるラピッドシティに戻り、少し南下したキーストンである。同僚夫妻は四年前にこの地で結婚式を挙げており、思い出の地再訪ということになる。その旅にもう一人の同僚と一緒につき合わされたということにもなるか。途中、御本人は不在だったが挙式の際の神父さんの教会を訪れ、日曜ミサにも参列させてもらった。中程で、参列者全員が近くの人に何事か声をかけ、握手を求め合う。言葉も分からないので、ただ握手

を返すだけ。文化の違いにとまどいを覚えた一瞬である。キリスト教徒でもないのに、今後二度とないであろう経験であった。

元はドーン・ロビンソンという人物による、西部史に名を残す偉人たちの巨大な記念物を彫刻するという構想だったという。それが政治化することで、当初の人物たちではあまりに地域的すぎ、また高価に付くということで、上記アメリカの民主政治の歴史を飾る大統領たちが変わつていったようだ。作業は一九二七年から当時既に有名な彫刻家グーツン・ボーグラムによって始められ、十四年間かけて現在の姿に仕上げたという。彼自身、愛国心の強い人だったというが、後を継いだ息子がリンカーンという名であるのはそれに由来するのであろうか。とにかくこうして民主主義の「聖地」、アメリカ人そのものと呼ばれる記念物が誕生したのである。

これとは別に、よりマイナーな、より地域的な、確かスー族の酋長だったかと思うが、インディアンズのクレイジー・ホースを記念した同様の記念物が、ここから小一時間、車で走った場所に建造されつつある。ただ五十年たつて、ようやく顔と腕の一部が姿を現しただけで、この後どれほどの期間を完成までに要するからにないという。

日本でこのような野ざらしの巨大石造物としては、どこかの磨崖仏のような仏教的モニュメントしか思い浮かばない。ただしそれの方がアメリカのものより歴史は古い。こうした造形は建国の歴史が浅く、愛国心のようなものを無理やり作り出さなければならなかった若い国のなせる業なのかもしれない。

(京浜歴史科学研究会事務局長 二〇〇二年一月十五日記)